

近代スポーツの誕生と発展から学べること

中西 純司（立命館大学）

1. 近代スポーツの誕生と発展

近代スポーツを原型とする今日のサッカーやラグビーといったフットボールの起源は、古くからイギリスの各地方（民族／民衆）で近代以前に行われていた「モブ・フットボール」（mob football）に見出すことができる（中西・岡村・行實，2020）。このモブ・フットボールは、特に禁止事項が定められていなかったことから、粗暴なプレイが何も考えずに展開されたり、競技中に殴る蹴るなどの暴力が無意識のうちに行われたりして、ときには死者が出ることも珍しくないほどの凄惨で野蛮な「民衆のフットボール」であった。しかし、菊（2018）によれば、産業革命後の間もない時期（18世紀後半）に、エリート教育を担う名門パブリック・スクールにおいても、生徒たちはこのモブ・フットボールのようなルールのない乱暴で荒々しい群衆フットボールに興じていたという。

そのため、19世紀前半からラグビー校の校長を務めたトーマス・アーノルド（1828-1842）や、彼の薫陶を受けた教え子でもある教師たちは、生徒たちの意思と自治・規律を尊重する「プリフェクト・ファギング制度」を用いて、群衆フットボールの楽しさを長時間、より安全で安心な形で誰もが享受できるよう自主的な改革を促したのである。これを受けて、生徒たちは、この群衆フットボールをみんなが長時間、何度でも楽しめる「安全で安心なスポーツ」へと改革するために、過剰な身体的エネルギーを発露させる暴力的回路を排除するルールを自ら工夫し受容することで、これまでにはなかったゲームの体系化・組織化・合理化を図った。そして生徒たちは、「身体的拘束・制約」を課した面倒なルールを克服したり、不便で不慣れなゲームを攻略したりするという「新たな『楽しさ』の発見とそのための自己規律化の徹底」（菊，2018）を自発的に学習し、群衆フットボールの「スポーツ化」（Sportization）によって「近代フットボール」を確立させたものと推察される。それはいわば、「面倒なルールのないスポーツは楽しめない」という「不便益」（川上，2011）精神の出現であったのかもしれない。

近代フットボールはその後、1840年代にルールの明文化が進んだものの、1863年に「フットボール協会（The Football Association）」が、そして1871年に「ラグビー・ユニオン（Rugby Football Union）」が結成され、それぞれのフットボール（アソシエーションフットボール＝サッカーとラグビーフットボール）のルールが統一されたことで、19世紀半ば頃に近代スポーツとして誕生し、発展していったと言われている。

2. スポーツの「文化」的学習：「スポーツ化」の過程から学ぶ

こうした近代スポーツの誕生と発展という「スポーツ化」の過程から、スポーツの「文化」的学習ができることは言うまでもない。第一に、Elias and Dunning（エリアス&ダニング，1986＝大平，1995）は、こうした近代スポーツの誕生、いわゆる、「スポーツ化」の過程が産業革命を契機に近代化されるイギリス社会の「文明化の過程」（「議会主義化」とルールや規範による「和平化」）と同時進行し、近代社会の暴力への「自己抑制」が強まったことでスポーツを楽しむ風気が自然にできあがっていくという、「スポーツと文明化」のダイナミズムを究明している。それゆえ、近代イギリスを中心に西洋社会で誕生した近代スポーツが「文明化の過程」を通じて、身体活動の根本となる過剰なエネルギーの発揮というある種の「暴力性」をいかにしてルールや規範のもとに自己抑制していったのかを近代社会の状況との関係性から学習することができる。

第二は、パブリック・スクールの生徒たちが「安全で安心なスポーツ」をみんなが長時間、何度でも楽しめるようにするために、生徒たちの英知を結集して「観念文化」（スポーツ観）や「行動文化」（ルールやフェアプレイ、技術・戦術などのスポーツ行動様式体系）、および「物質文化」（施設・設備や用具・用品・衣服などのスポーツ物的物体系）といった文化的構成要素（菊，2012）を創意工夫していくという「スポーツ化」の過程を学習することが肝要である。つまり、スポーツは、人類（人間）が人生や生活をより豊かに充実して生きていくために、その時代その時代にもてる英知を結集して創造するという「人間の文化的な営み」によって生まれた「人類共通の文化」であり、今後も社会状況や歴史的変動などの影響によって変化・進化し続けていくであろう。

最後に、近代スポーツには、能動主義と個人主義を基調にした開放的な近代（英国）社会における人々のライフスタイルの形成にとって基本的に望まれる6つの特徴（教育的性格）があったことを学習することができる。すなわち、①自己の過剰な身体的エネルギーをコントロールし、強い意志や努力を重視するという「禁欲的性格」、②平等な条件のもとでの、フェアプレイや自己犠牲などの黙示的な価値を重視する「倫理的性格」、③身体的パワーを巧みにコントロールする技術や知略を重んじる「知的・技術的性格」、④ゲームを組み立てるための集団化や組織編成（役割分担）を工夫するという「組織的性格」、⑤狭い面積しかとれない都市的空間に応じたプレイ空間

を設定し、都市のライフスタイルに対応するという「都市的性格」、そして何よりも、⑥安全保障の価値としての「非暴力的性格」であり、逆説的に言えば、このような教育的性格を内面化した人々の存在がなければ、近代以降の社会が成立することはなかった（菊，2012）、と言ってもよい。これらの6つの特徴は、近代スポーツという「不便なこと」「面倒くさいこと」をあえて意図的に追求していくことでしか得られない「益」であり、まさしく「不便益」（川上，2019；中西・岡村・行實，2020）として措定することができる。こうした近代スポーツの教育的性格はやがて、スポーツの「文化的価値」として普及・発展していくことになる。いってみれば、スポーツには「不便なくしては得られない効用（文化的価値）がある」ということを学ぶ必要がある。

3. スポーツの文化的価値とは何か

「スポーツは、自発的な運動の楽しみを基調とする人類共通の文化である。スポーツのこの文化的特性が十分に尊重されるとき、個人的にも社会的にもその豊かな意義と価値を望むことができる」[日本体育協会・日本オリンピック委員会「スポーツ宣言日本」（2011年7月15日）]。つまり、「人間の本源的な欲求充足（活動・競争・達成・克服・自己表現など）に伴う『運動の楽しみや喜び』（内在的・本質的価値）」（≡ 不便益）を求めて自らが行う身体運動のすべてが「スポーツ」（Sport）なのである。私たち人間は、「便利な（すぎる）現代社会」において、スポーツという文化との多様なかかわり方（する・みる・ささえる）を通じて、スポーツを発明した先人たちの英知や思いなどを追体験しながらその文化性を学ぶことができる。そして、スポーツのこの文化性（内在的・本質的価値）が十分に尊重されるとき、個人的にも社会的にもスポーツの豊かな価値（外在的・手段的価値）を創造することができるのである。具体的には、①個人的価値、②教育的価値、③鑑賞的価値、④社会・生活向上価値、⑤経済的価値、⑥国際的価値という「6つ」がスポーツの文化的価値として期待される（中西，2012）。

第一に、個人的価値は、④人間の本源的な欲求充足という「運動の楽しみ」から得られる内在的価値と、⑤人間生活上のある種の必要充足という外在的価値（健康・体力の維持向上やストレス解消、生活習慣病の予防など）の2つが表裏一体化している。しかし何よりも、スポーツは「運動の楽しみ」を自ら求めていく点に、文化的な意味や独自の価値があることは想像に難くないことである。第二に、教育的価値は、相互尊敬に基づく公正さと自己規律を尊ぶフェアプレイの精神の醸成や豊かな人間性の育成に役立つことである。第三に、鑑賞的価値とは、人間の可能性の極限に挑戦するアスリートのひたむきな姿やトップスポーツの試合・イベント等が“みる人”に夢や感動、希望や勇気などを与え、スポーツ文化への興味・関心を喚起するという効果である。第四は、家族・友人や地域社会との人間的交流の促進や、活力ある社会の形成、ソーシャルキャピタルの高い豊かな地域づくりなどに貢献するという社会・生活向上価値効用である。第五に、経済的価値とは、スポーツ関連産業の拡大等による新たな需要と雇用の創出や観光の推進、および人々の心身の健康保持・増進による医療費等の節減といった経済活性化にかかわる効用である。最後の国際的価値は、国際平和の希求と世界の人々との相互理解を促進し、国際交流・協力関係の構築（友好と親善）に寄与するとともに、国際的地位の向上にも役立つことである。

また、ある意味、上記①と②は、不便で面倒くさいスポーツに自ら進んで挑戦しなければ得られない内在的価値であり、スポーツ文化が各個人の豊かな生活の形成にもたらす「不便益」であると言ってもよかろう。これに対して、上記③～⑥は、スポーツ文化が社会全体にもたらす外在的価値であり、豊かなスポーツ文化の創造や地域社会・経済の発展に寄与するという「社会的価値」ということもできる。しかし、スポーツ文化とは本来、「無色透明で無価値なものに等しい」メディア（媒体）特性を有するものであり（菊・茂木，2016）、こうした無色透明で無価値なスポーツ文化に対して多様な価値付与をしているのはまさに、スポーツと多様なかかわり方を楽しむ人間自身であることを肝に銘じておく必要がある。

4. 人間とスポーツとのかかわり方によって異なる「スポーツ価値意識」

先に述べたように、私たち人間は、スポーツとの多様なかかわり方（する・みる・ささえる）を通じて、その文化的価値を享受することができる。それゆえ、スポーツとのかかわり方によって「スポーツ価値意識」は大きく異なると言っても過言ではない。ここでいうスポーツ価値意識とは、「スポーツの性能や属性を望ましいと考える各主体の意識」と捉えることができる。すなわち、スポーツに価値が「ある」か「ない」かを決めているのは、それにかかわっている主体（人間自身）なのである。こうした視座から3年間（2014～2016年度）にわたって行われた理論的かつ実証的な研究が（公財）日本体育協会スポーツ医・科学研究事業「新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発」研究プロジェクト（班長：早稲田大学 木村和彦氏）である。

この研究プロジェクトの成果として、スポーツを「する」人の価値意識は、個人的価値（プレイ欲求の充足、人間的成長、健康・体づくり、社交、医療）と社会的価値（社会・生活向上価値、経済的価値、国際的価値、教育的価値）から構成されることが明確になった。また、スポーツを「みる」人の価値意識は、本質的価値（代理達成、

ドラマ、パフォーマンス)や手段的価値(社交、逃避)、および社会的価値(集団のアイデンティティ)で構成されていた。さらに、スポーツを「ささえる」人の価値意識は、本質的価値(学習、自己改革、社会的義務、地域奉仕)と手段的価値(社交、キャリア形成、能力・経験活用)から構成されることが明らかにされた。このように、スポーツにどのような価値があるのかは各主体の評価によって付与され、こうしたスポーツ価値意識が人々の「スポーツ観」という観念文化の形成にも大きな影響を及ぼしているのかもしれない。

5. 便利さやビジネス化がもたらす、スポーツ文化の「危機」を学ぶ

時代は遡るが、社会・経済等の歪みを反映した「現代スポーツ」の問題点を痛切に批判した Michener (ミッチェナー, 1976 = 宮川, 1978) は、「スポーツをそのまま批判なしに受け入れられる時代は、もう過去のものとなっている。スポーツは今や最も注意深い吟味と、最も鋭い批判にさらされなければならない」と、文化としてのスポーツの本質から逸脱していく現代スポーツの危機を真摯に説き、警鐘を鳴らしている。しかし、ミッチェナーが指摘した約 45 年前当時の「スポーツの危機」とは質的に異なるかもしれないが、今や、便利さやビジネス化によってスポーツ文化が歪められていくという危機的状況(以下の事例)はより多様化・複雑化してきている。

- ▶ 事例 1: 「テレビ放映向けのルール改正」による経済的価値と鑑賞的価値の過度の追求 (小川, 2012)。
- ▶ 事例 2: 「スポーツ用具・用品の技術革新」によるスポーツパフォーマンス向上への疑問。
- ▶ 事例 3: 「ICT 化によるビデオ判定システムの導入」による偶然性の欠如(「三笥の 1 ミリ」は?)。
- ▶ 事例 4: MLB の試合時間短縮のための「申告敬遠制度」「ピッチクロック」の導入は誰のためなのか。
- ▶ 事例 5: オリンピックという華やかな国際イベント舞台の裏で起こる「もう 1 つのイベント(出来事)」= 五輪汚職・談合という「スポーツガバナンス問題」や、国や組織・団体、個人などが、スポーツを利用して自身の悪いイメージを払拭しようとしたり、問題を覆い隠そうとしたりする「スポーツウォッシング」問題などのクローズアップをスポーツ文化の観点からどのように解決すればよいのか。

[文献]

- Elias, N. and Dunning, E. (1986) *Quest for excitement: Sport and leisure in the civilizing process*. Blackwell.
- <大平 章訳 (1995) スポーツと文明化—興奮の探求—. 法政大学出版局. >
- 川上浩司 (2011) 不便から生まれるデザイン: 工学に活かす常識を超えた発想. 化学同人.
- 川上浩司 (2017) 不便益: 手間をかけるシステムのデザイン. 近代科学社.
- 川上浩司 (2019) 不便益のススメ: 新しいデザインを求めて (岩波ジュニア新書). 岩波書店.
- 菊 幸一 (2012) 序 スポーツ文化論の視点. 井上 俊・菊 幸一編著, よくわかるスポーツ文化論. ミネルヴァ書房, pp.2-5.
- 菊 幸一 (2018) スポーツと教育の結合, その系譜を読み解く. 現代スポーツ評論, 38: 32-45.
- 菊 幸一・茂木宏子 (2016) 第 2 章 スポーツ価値への社会学的探求. (公財) 日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会, 平成 27 年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅲ 新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発—第 2 報—. (公財) 日本体育協会, pp.37-47.
- (公財) 日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会 (2015) 平成 26 年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅲ 新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発第 1 報. (公財) 日本体育協会.
- (公財) 日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会 (2016) 平成 27 年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅲ 新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発第 2 報. (公財) 日本体育協会.
- (公財) 日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会 (2017) 平成 28 年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅰ 新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発第 3 報. (公財) 日本体育協会.
- Michener, J. A. (1976) *Sports in America*. Random House, Inc. <宮川 毅訳 (1978) スポーツの危機(上・下). サイマル出版会. >
- 見田宗介 (1966) 価値意識の理論—欲望と道徳の社会学. 弘文堂.
- 中西純司 (2012) 「文化としてのスポーツ」の価値. 関西学院大学人間福祉学研究, 5 (1): 7-24.
- 中西純司・岡村誠・行實鉄平 (2020) スポーツという「不便益」文化論の展開—もう 1 つのスポーツ文化論への挑戦—. 立命館産業社会論集, 56 (1): 155-178.
- 日本体育協会・日本オリンピック委員会 (2011) 「スポーツ宣言日本—二十一世紀におけるスポーツの使命— (2011 年 7 月 15 日)」。 https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data0/uploadFiles/20110804142538_1.pdf, (参照日: 2023 年 5 月 5 日)。
- 小川 勝 (2012) オリンピックと商業主義. 集英社新書.